

末 黒 野

すぐろの

3月号
(通巻883号)



松本三千夫名誉主宰
追悼号

冬桜

庭園のくまなく燃ゆる冬紅葉
冬芒風のかなたの光る海
わが町の社は無人冬椿
一山のこの日当りの冬椿
さかりとも咲き始めとも冬桜
山脈は遙かとなりぬ冬菜畑
都電健在枯れの都を幾まがり
冬星の海や円形レストラン
西行の松のねぢれを冬の蝶
たたきごばう播粉木ひとつ家宝なる
北吹けば白波碎け烏帽子岩
冬晴や崖の渴きの草にまで

黒滝志麻子
(主宰)

大晦日

山麓や隅の隅まで枯すすき
戻らうと言ひだせぬまま冬紅葉
釣銭をまさぐる音や酉の市
通らせてもらふ庫裡脇石露の花
烏発ち雀らの国冬木立
手応へをまづは確かめ大根引き
少年の一打の越すや大冬木
落ちさうなる大岩抱き山眠る
雀らのはちきれさうや冬うらら
大晦日蕎麦よりパスタ選ぶ子ら
呼び合うて千木に止りぬ初鴉
中島の松より発てり初雀

森清堯
(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

袴着

菅野日出子

葉を落し空を彩どる禅寺丸
縁結びの孫凶を引く神の留守
蹲踞を囲む玉砂利竜の玉
袴着や殿となりきるきかん坊
紅殻の褪せし山門冬の虫
又一人友は施設へ冬ざる
総持寺の見返り坂や冬椿
鳥鳴くや一夜に消ゆる実千両
稜線の雪をつらぬき電波塔
隅田川の芭蕉の座像ゆりかもめ

三千夫師忌

田中臥石

紅葉づるや下総古墳塚の徑
妻嘆くなよ原発の枯葛
枯野原此所原発の妻の郷
下総の江戸の家並や時雨傘
山茶花や母の遠忌の夜の雨
大東の岬の冬や波の花
友二人^{玉泉 三千夫兩師へ}生死分ちて師走来ぬ
玉泉師去るを問ふまい花八手
存分に生きて師走や三千夫師忌
弔電を送る虚ろなこころ寒



冬木立

森清信子

青年の自負の目差竜の玉
冬草の応ふる弾みスニーカー
連れの背の闇をはがす灯冬木立
檣頭の揺れにとどまり冬かもめ
青木の実軍鶏の蹴上ぐる砂埃
薄鼠を残して消えぬ冬の虹
高空の疾き風かはし鷹一羽
毛糸編むなかなか効かぬ葛根湯
夫留守の物足りなさや冬夕焼
カナリアに歌手の名を付け冬麗

菊花展

石黒興平

総出にて朝の水遣り菊花店
囲して菊展未だ審査中
どれも皆金賞に見ゆ菊花展
金賞の菊の前にて撮られけり
人波や暮れて華やぐ酉の市
赤子抱くやうに熊手を抱へけり
飛びきれぬ空の広さや流れ星
どちらかと言へば幸せ大根引く
茅葺の炭焼小屋や一升瓶
漱石忌炬燵と辞書と歳時記と

紙漉女

岡野里子

古民家の軒の雨滴や実南天
冬木影踏みて参道朱塗門
丹の橋の影置く池や小六月
冬めくや反り橋池に影正し
殿の着きて整ふ鴨の陣
山門をくぐる木枯阿字ヶ池
波起こし波を均して紙漉女
紙漉女乳色の波重ねつつ
駆け寄れる幼の瞳冬木の芽
悼三千夫先生
しぐるるや灯の忽と消えし句座



乙矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)



冬 天 及川照子

冬天の花道を逝く恩師かな
雲染めてさざ波染めて冬落暉
鐘楼の残る冬日や山の寺
愛読書のこころ再読漱石忌
弁慶の勇姿の形や枯蠟螂
雨しとど艶深めたる落葉かな
岩壁の日だまりの中石路の花

冬夕焼 大川暉美

木の实落つ耳に一つの音拾ふ
枯菊や束ぬる指に匂ひたち
落葉踏む足裏に小さき音生まれ
海よりの風にスイング懸大根
冬夕焼海へ光の帯流れ
底冷えや日窮る廊の足裏より
悼松本三千夫先生
師逝きて胸熱くせり虎落笛

冬 桜 岡田史女

着ぶくれて山門くぐる時頼忌
禅林に尺八ひびく竜の玉
大手門前の人出や冬ぬくし
乾濠道濠濠や木の葉散る
大嘗宮参観経路冬桜
謹悼三千夫先生
山茶花の散りしく永久の別れかな
大いなる師を見失なふ冬銀河

傷 跡 小田嶋野笛

棟上げの出稼ぎ大工よく笑ふ
みな抜いて身軽となりぬ大根畑
冬落暉まぶしきものは富士の雪
傷跡は自慢の種や鎌鼬
悪業を有耶無耶にして炬燵猫
隣席の革ジャンパーや葉巻の香
鷹翔ぶや富士の真白き西空へ

秋 明 菊 加藤静江

尼寺や秋明菊の白き寂
日溜りの冬蝶の黄の淡きかな
小春日や園児かたまるたいこ橋
赤き実の多き公園冬の鳥
冬うらら欄間の竜のうす埃
冬菊の白に翳りのなかりけり
濁流の激つ峡谷散紅葉

夕しぐれ 斉藤マキ子

うたた寝の夫に肩貸す暖房車
折れてまたつづく坂道みかん狩
口どけのよき落雁や冬ぬくし
アイロンの熱くなる間や夕しぐれ
古井戸の盤石の蓋山眠る
少しづつ眠さふくらむ炬燵かな
年暮るる火にも水にも神のゐて

冬 日 和 堺 昌子

母ときし思ひ出深き菊花展
敬命先生の笑顔はつきり冬の空
虚子の句の自筆の句碑や冬ぬくし
園晴れて灯籠の影冬日和
柿を挽ぐ柿の甘さを言ひながら
身に沁むや風の頬打つ松林
借景の藁葺きの屋根冬牡丹

石路の花 高木邦雄

風神の駆くる虚空や星冴えて
朝の香の磯辺の小径石路の花
冬銀河俳句一路の師の逝きて
霜晴や童等小走りの通学路
曾良の縦く翁の像や冬没日
寄席果てて潤む街の灯小夜時雨
霜の夜やシヨパン聴きつつ夜半まで

冬ぬくし 今村千年

ふところに海ある都冬ぬくし
もののふの都に五山竜の玉
六地藏ひとつひとつに小春風
人気なき生家の籬石路の花
毛糸編む妣はひねもす縁側に
いにしへの鯖の道とや枯木星
年忘マイク離さぬ句友ゐて



青炎集

黒滝志麻子選



狭山 沼崎千枝

横浜 池乗恵美子

小春空レゴのごとくに家の建ち
ビルの谷手締め競り合ふ酉の市
金色の熊手夜店の灯の真中
締むる手や人分けて行く大熊手
美容師は髭の貴公子冬うらら
十二月友の舞台の第九聞く

立冬の足裏に入る力かな
残り香の母のぬくもり冬座敷
寄り添ふは我影ばかり冬の月
しぐるるや鐘の音重き段葛
寄鍋やぐつぐつと本音もれ
身ほとりに不幸のなくて十二月

日野 淵田則子

横浜 本間せつ子

冬帽子風に真向ふ前屈み
ゴッホの黄のマフラーバスの老紳士
富士の影を浮かせ冬日の沈みけり
アスレチックを踏破の証冬の汗
山中湖冬のカヌーの点々と
老松の失せぬ気概や冬構

先客は楓落葉や露天風呂
裏庭の少年泣けり鎌鼬
冬菊や神社に小さき幼稚園
冬蝶の薄日に羽を鎮めけり
冬天や夕日とどまる松の枝
背中より魂の抜けゆく日向ぼこ

横浜 大霜朔朗

横浜 中野大樹

パノラマのバスの前席紅葉山
断捨離の進む書齋や小春風
短日や明日の予定は気負はずに
黄と言へず紅とも言へず桜枯る
スクワットを今日は省略大根引き
静寂の英兵墓地や冬の薔薇

二百鉢のざる菊の描く富岳かな
恒例の町内会の芋煮かな
朝靄ににじむ紅葉や城址山
山茶花や江ノ電軒をすれすれに
紅葉散る笑ふ羅漢の人集め
三浦の浜ずらりと並ぶ懸大根

横浜 山本茂子

横浜 谷島弘康

語り継ぐ戦禍の記憶開戦日
捌きつつ食む生牡蠣の旨さかな
新薬に一喜一憂冬さるる
からからと音の出さうな干菜かな
子の遺す蔵書数多や煤払ふ
銀行に長蛇の列や年の暮

冬風や夕日のみ込む日本海
冬渚海のうねりに砂の輝り
置てふ文化に転た寝冬ぬくし
パソコンの横文字慣れぬ漱石忌
バス停に袋飛び出る葱の先
枯れ庭に点景添ふる二羽の鳩

横浜 遠藤清子

横浜 高橋正江

味噌煮込みの幟はためき冬に入る
港内の遊覧船や小春風
靴音に音符のあるごと落葉道
人住まぬ家や石路咲く垣隣
磨崖仏の頬染まりたる冬夕焼
冬月や笙の音色の胸に衝く

馬車の音の響く並木の黄葉かな
隠沼の水面彩る散紅葉
薄ら日の里や錦の冬紅葉
日向ぼこ妣が隣にゐるやうな
木の葉降る中や園児の鬼ごっこ
風の子も背に貼りたる紙懐炉

耕 土 集

森清 堯 選



年の瀬や鉄打つ音と飛ぶ火の粉

横浜 久島しんの

塩引鮭の身の締まりゆく地棟かな

枯尾花命尽くまで風に揺れ

虎落笛救へし子らを思ふ海

少年の目の純朴や冬の朝

藪柑子の自慢の垣根三代目

雪女になりたしといふ男の子

櫛の森冬日をこぼし葉をこぼし

落椿漬物石に女と一字

傷つかぬ言葉選びぬ堀炬燵

町田 中野千代子

鰯酒や夫の髭には白きもの

横浜 岩崎 藍

兎のよたれ出でぬ聖菓に灯ともせば

劇場を出でて雪夜の余韻かな

身の熟し連れと憂ひて年惜しむ

百獸を手懐くる夢冬ぬくし

横浜 小長谷 紘

道端の草の紅葉や雨しとど

冬霧や朝の街並すつぼりと

冬阜穂先短き庭篝

小春日やデイサービスの送迎車

寒き日や師の笑み遠く星となり

横浜 秋山 文字

横浜 白居 澄子

くさめして記憶の粒の零れけり

無聊なる一人の夜や生姜酒

葛湯冷め期限切れなる我が記憶

ゴルフ場の要となりぬ冬紅葉

一つづつ忘るる記憶柿落葉

大掃除忽とくるほし暮の雨

そそくさとうどんほほばる師走かな

白菜を早く漬けよとせがむ夫

底冷えや首筋の風背に抜けて

裸木の著き枝先空の青